

大都市の交通空間について——大阪市梅田地区を例として——

京都大学工学部 正員 天野光三

京都大学工学部 正員 ○榊原和彦

京都大学大学院 学生員 江ロー郎

1 交通空間について

i) 交通空間の概念

都市空間は、最も基本的には、単位空間——単一または少数の機能を担う——と、媒介空間——単位空間の集合も仲立ちし、媒介する。その機能は、交通、情報・エネルギー伝達などを含む広義のコミュニケーションである——との二様に分けて理解できよう。交通空間は、この媒介空間そのもの、またはその一部であると考えられる。実体的には、交通システムに関する構成要素——歩道、広場、プラットフォーム、階段、エスカレータ、エレベーターコア、駐車場など——そして、情報システム、エネルギーシステムに関する構成要素——種々の都市設備など——によって構成される空間である。また、生活空間としての交通空間、意味論的あるいは現象学的空間としての交通空間概念についても規定されるべきであろう。(省略)

ii) 交通空間研究の目的と意義

媒介空間が都市の infrastructure = 基礎構造として都市の空間構造を規定するといった考え^{*}は妥当であろう。この意味で、交通空間の研究は都市の空間構成そのものの研究でもある。しかしこう考えると、研究の覆うべき領域は限りなく広がる。そこでこれを今少し限定しよう。現実的問題として、種々の問題点を抱えた都市交通システムの改善の必要性が存在し、交通空間に関連するその解決策として、交通機関の通路の確保——交通システム改善の一手段として、通路の拡張、交通

機関の新設が考えられる。——、交通空間の再構成——限られた都市空間内で都市交通システムを理想的なものとするために——、といった課題が浮かび上がる。このような現実的要請の中で、既存都市内における交通空間の可能性を考察し、その実現への端緒を開くことが本研究の目的であり、その研究領域は、交通空間構成の研究——ストリートファニチュアから、都市全体交通空間にまで至り、その多くはケーススタディによるであろう。そして心理学的、行動学的、現象学的などの空間、環境の研究がこれを支える——、利用可能空間、再開発可能性の調査・研究、制度・法律的な研究など多岐にわたるであろう。

2. 梅田地区におけるケーススタディ

i) ケーススタディの目的と計画対象地区

本ケーススタディの目的は、大都市の都心ターミナル地区の計画を行い、交通空間構成の可能性を探ることであり、大阪市北區の梅田地区をとりあげた。(計画対象地域の詳細については省略する。)

ii) 梅田地区の特性と問題点

地区特性は次のとおりである。

a) 大阪市内、京阪神圏内最大の通勤ターミナル、全国的規模の地域間、都市間交通の一大ターミナル、として位置づけできる。

b) 当地区以北に広がる住居地域と以南の業務商業地域とを結ぶ交通の結節点である——

10本の国私鉄、地下鉄線と、多数の市内、郊外バス路線の集中。

c) 業務、商業、娯楽などの複合的機能をそ

なえる地区である。

大きな問題点として下記が挙げられる。

a) 流動(主として人の)が円滑でない。

b) アクセシビリティが悪い。

c) 地表上で、歩車が混在し、歩行者流動を阻害し、安全性を低下させている。

d) 地下通路が発達しているが、行動の指標となるオリエンテーション、定位が悪く、また災害時の安全性も保証されていない。

iii) 計画の目標と前提

a) 機能性の目標——詳しくは省略

b) 交通環境の目標——詳しくは省略

c) 視覚性の目標——詳しくは省略

の三項目を目標とするが、これらは言わば分析的、更迭的に設定したただけのものであり、こればかりでなく、全体性として立ち現われる生活空間、象徴的空間としての計画という点にも留意する。

計画の前提としては次のものを考える。

a) 計画時点として昭和60年を想定する。

b) 地区特性はこの時点では変らない。

c) 同鉄用地(大阪駅を含む)はほぼ全面的に変更し、第二新幹線東入れ、貨物駅の縮小撤去

鉄道管理局の再開発などを考慮する。

d) 上記c)を除き、既設建造物などについては、既に計画のあるものを除き、現状を大きく変更しない。

iv) 計画

a) アーバンデッキを設け、歩車分離と歩行者専用通路の確保をはかった。

b) 動く歩道、エスカレータなどの機能的配置を行い、地区全体を一体の歩行者流動システムとし、アクセシビリティをよくする。

c) 地下道は改造により単純な空間構造とし、エレベーター・グロウトを設けてレヴェル移動の核、ランドマークとした。

d) その他、大屋根の設置など、快適性、安全性、保健性、平等性の保持をはかった。

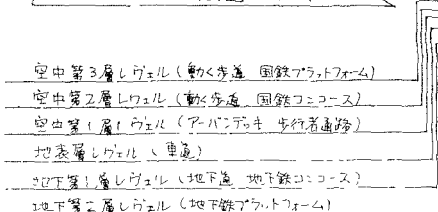
詳しくは講演席上で示す。

v) 計画のあわりに

本ケーススタディは簡略な調査、仮定のもとに、大略的計画を行なったものであり、代替案作成、より詳細な計画、より精密な種々の調査・建設への制度、法律、経済性の検討など、多くの課題を残すものである。

※ Peter Smithans のベルリン計画、ロンドン道路計画

梅田地区交通空間計画：断面図



- a 大屋根
- b 国鉄プラットフォーム
- c 国鉄コンコース
- d 地下鉄
- e 動く歩道
- f 新種交通機関
- g エレベーター・グロウト

0 50 100m

